

第3回東大阪市立新博物館整備基本計画審議会 議事録

開催日時	令和6年5月29日（水） 14時00分から16時30分
会場	東大阪市役所 会議室
出席者 審議会委員	鈴木会長、大西委員、中村委員、弘本委員、村上委員
配布資料	・韓国博物館の事例 ・国内の子ども向け施設の事例 ・常設展示・子ども展示の考え方 ・ゾーニングプラン、諸室面積表、展示計画案 ・展示構成表 ・LINE アンケート集計結果

1 開会

委員5名全員出席につき、東大阪市立新博物館整備基本計画審議会規則第5条第2項の規定により審議会は成立することを報告。

2 案件1 子ども向け展示について

(1) 韓国の事例紹介

・委員より韓国の子どもの向け展示について説明。

《委員》

・子ども博物館というのは大小問わず子ども専用の博物館と理解いただきたい。子ども向け博物館と子ども博物館は区別が難しいが、韓国の場合は、子ども向け博物館は大人向けの博物館と同じくらいのスペースを要する。

ハローキティアイランド済州島：子ども・大人向け

フィギュアミュージアム済州：子ども・大人向け

ホジュン博物館：漢方医・東宝医科学の博物館、子ども向けの展示有り

米博物館：農業博物館に隣接、子ども向け展示コーナー有り、大人も入館できる

京畿道子ども博物館：入館は子どものみ

区立扶余子ども博物館：大人向けの展示を子ども用にレプリカ化し、大人向けでない

国立慶州子ども博物館：入館は子どものみ

国立中央博物館：レプリカ展示

国立金海子ども博物館：入館は子どものみ

国立済州博物館：子ども向けエリアの中にパソコンが設置

国立民族博物館：子どもエリアの入館は子どものみ

済州子ども海女博物館：海女博物館の中にあり、海女道具の展示はなく、遊びの施設

トリックアイ3D美術館

(2) 国内の子ども向け施設の事例紹介

《トータルメディア》

国内の博物館の中で、子ども向けの体験の提供や学びの機会の提供の先進事例とともに、子ども展示の考え方を説明。国内の子ども向けの展示施設の事例では、その多くが自然史系、または科学系の博物館が多いのが実態。例えば標本や剥製のように観察が学びにつながりやすいから。また、国立・県立の博物館が先進事例としても多い。

◆三重県総合博物館 こども体験展示室

1 時間定員 60 名入替制。対象は小学生以下。

人物系や自然史系の展示が常設にある博物館だが、この資料室では自然史系を中心に一部昔の道具の展示を子ども向けに展開している。アスレチック的に楽しみながら展示資料や、三重県の自然の面白さを感じてもらうのが主な目的。

◆国立科学博物館 親と子のたんけんひろばコンパス

対象年齢は 4 歳から 6 歳、小学校低学年。子どもとその保護者の方限定の施設。

自然史系の展示室。アスレチックを体験しながら資料を発見する、あそびの中で資料と出会う展示手法、またワークショップ、工作、お絵かきといった遊びを通して自然の資料や観察するきっかけをもたす手法がとられている。

◆日本科学未来館 “おや？” っこひろば

対象は未就学児など低い年齢層。親子、または保護者引率者同伴での利用。

小さな子どもが親子の体験を通して、コミュニケーションをとりながら学びのきっかけをつかんでもらう目的の施設。

◆九州国立博物館 体験型展示室あじっば

アジアを中心にした様々な国の文化に触れることがメインテーマ。

各国の展示ブースに、民族衣装や楽器、おもちゃが置かれており、それで遊んだり、体験したりできる。特徴としてボランティアとの交流を強く意識した施設である。

◆八戸ポータルミュージアム はっち

5 階建ての建物の複合施設の中に 1～3 階が観光展示、4 階に「こどもはっち」として児童館の機能が入っている。4 階では木で作ったおもちゃ、八戸の伝統工芸をもとにしたおもちゃを子どもたちが自由に遊べるコーナーがある。主に子育て世代の大人や子どもをメインとしながら、ここに来たついでに別のフロアの観光展示や、体験をしてもらう機会を増やす効果を発揮している施設。

(3) 新博物館の常設展示・子ども展示の考え方

《トータルメディア》

子ども展示の展開にあたり、3 つのポイントをクリアしていきたいと考えている。

- 1, 遊びと学びを充実した二本軸。仮に 1 階 2 階としているが、遊びの展示フロアと学びの展示フロアを明確に分けている。展示空間も、しっかり資料に出会いたい方、また、遊びながら展示内容に興味を持っていただく方のエリアをゾーニングし、それぞれの展示内容を尊重した構成を考えたい。
- 2, 開かれた博物館につながるパーク機能。遊びエリア、子ども展示のエリアについては、博物館であると同時に公園に来てもらう感覚で、博物館に来てもらうための敷居を下げる、まずはパークきっかけで博物館に来ていただけるような、開かれた空間を意識して作っていききたい。
- 3, テーマを反映させた気付きを与える展示手法。博物館に来てもらうために遊びのエリアを作るのは重要だが、遊びだけで終わらせない。展示内容に対し関心を持ってもらうきっかけ作りとなるよう、遊びのフロアと学びのフロアのテーマを関連させたい。具体的にはパークフロアとミュージアムフロアの展示内容を同じテーマ構成にしていこう。また、往来したときに気付きがあるように、観察のきっかけになるような展示手法を子ども向けのパークと展示室にも取り入れていくという考え方。

遊びと学びについてはステップアップのような考え方で、今回のメインターゲットである東大阪の子ども達、親子層には学びのステップを踏んでいただき、より東大阪の事を知っていただけるような作りを実現したい。

まず遊びのパークフロア。子どもたちと一緒に親子で来ていただき学びのきっかけを作ってもらう。そこからもう少し大人向けの展示フロアで、しっかり資料と向き合いながら実際に東大阪の歴史のより深いところを知っていただく。こうした 2 段構成の展示の見方を提案していくことで、幼稚園の頃に親子で来た博物館が、遠足で 2 回目、3 回目に久々に来た時に、より学びの深い空間になるように作っていききたいと考えている。

展示フロアの考え方

パークフロア・ミュージアムフロアについての詳細説明。

各展示フロアの考え方として、パークフロアは子ども展示室として開かれた学びのきっかけとなる空間として整備していききたい。

2 階のミュージアムフロアは常設展示室として、大人から子どもまで資料と向き合っていただく展示となるので、1 階のテーマをそのまま生かしながらより学びを進化させる空間として整備していく。

新博物館における子ども展示の位置付けとして守っていききたいポイントの 3 点目「テーマを関連させながら気付きを与える」という点で、ゾーニングを共存させる、というのを基本にしたいと考えている。常設展示室の構成はガイダンスシアターから入り、交流・自然と暮らし・ものづくり・祈りの形という 4 つのテーマで構成を想定されると認識。そのため、ガイダンスと共に、歴史の流れを感じながら、4 つのテーマのゾーン構成を子ども展示室の方でも踏襲したい。具体的には

- ・ 全身で思いきり遊んでいただける、アスレチックを含めた自然と暮らしのエリア
- ・ 観察して想像して作ってみる体験が出来る祈りの形のエリア
- ・ 実際の水車などの装置の規模感を体験していただくものづくりのエリア
- ・ 当時の資料レプリカを触ることで昔の時代に興味を持っていただける交流のエリア

(4) 文化財課の考え方

《事務局》

市の考え方を説明。

今回文化財課として提案している、子ども向け展示あるいは子ども博物館は、ご紹介いただいた韓国の事例、あるいは国内の科学系博物館の事例など、未就学児から博物館に親しめる工夫を、基礎自治体として市立の歴史系博物館に応用する、という意味で先駆的な取り組みになろうかと考える。

新博物館の基本構想の基本理念の1番目、「マイファーストミュージアム」というキーワードにおいて説明をしており、未就学児から博物館という場に親しんでもらえるよう、遊びから学びを得るような体験空間を作るとうたっている。

これを最も分かりやすい状態で具体化したものが今回の提案である。

子どもファーストという市の施策を新博物館整備事業という事業の中で率先して取り組んでいくことで、市としてもタイアップ的な事業になると思う。

基本理念の2番目、「マイフェイバリットミュージアム」という点に関しても、未就学児から小学校低学年をターゲットとした展示に親しんでもらい、小学校中学年・高学年になって社会見学等の機会で常設展示や企画展示、体験プログラム等に触れていただいた際に学びが深くなる。ライフステージに合わせて親しんでもらえる仕組み。まさにお気に入りの博物館にしよう。

これらの点を踏まえ、市としても子ども向け展示、子ども博物館を積極的に活用していきたいという考えを持っている。その点について議論いただきたい。

※子ども展示の是非について

《会長》

各委員、文化財課のミュージアム構想に賛成・保留・反対など意見とその理由を説明していただきたい。

《委員》

私が博物館に期待したいのは、歴史民俗系の子ども博物館であるということ。2階の常設展示の引き金にもなると思う。トータルメディアの提案は、科学館の発想が多く入っていると見受けられるため、歴史民俗系の発想を強化してほしい。

《会長》

今回基本計画であるため、実施計画の際に歴史の子どもミュージアムのようになっているという希望と解釈していただきたい。

《委員》

マイファーストミュージアムとして子どもが入るきっかけとしては良いと思う。1階はテーマパーク性が強いので、もう少し2階へのアプローチとしてきっかけの要素があってもよいと思う。幼児・小学生だけでなく、中学生高校生が来てもしっかり学べるような博物館にしていきたい。

《会長》

2階の常設展示と1階の子どもミュージアムは関係ない展示があってもよく、必ずしも1階と2階のテーマがリンクする必要はない。その方が常設展示に自由な発想が生まれる。

《委員》

1階のフロアが学習的な要素が小学校に上がって3年生～6年生、中学生に対しては弱いという印象。子どもたちを連れて行った場合、現提案では東大阪の歴史を学ぶという点で、すごく歴史を学んだ、という感覚より、面白かった、楽しかったという印象が大きく残ると考える。

《会長》

遊びと学び、両方追求する場合、学びをもう少し重視した展示が見えてきていないという指摘。

《委員》

東大阪市の子どもファーストという考え方や、マイファーストミュージアムを目指すという点においては、1階と2階を、思い切って未就学児を中心としたフロアと学びのフロアとする分け方は一つの考え方としてはありえる。ただ、キッズミュージアム的なものは、大阪市でも20年くらい前からあり、日本中に似たようなものがあるため、東大阪の博物館が一線画しているということを示していくためには、例えば東大阪のモノづくりの技術的な蓄積などが、遊びの展示に生かされるような工夫があればよい。東大阪だからこれが体験できるんだというものを、未就学児までにも提供すべき。2階に関しては、私は子どもが主体的に学ぶという側面があってもよいと思う。さらにサポートするツールを作ること、展示をより深く探究、主体的に発見していけるようなミュージアムの運営の在り方もあってもよいかと思う。常設の内容を固定と考えずに、ある程度中身を変えながらより深い学びが出来れば、子どもが成長したとしても何度でも来るたびに新たな気づきを得られる。そういう指向性があれば、限られた面積でも深みを出していけるのでは。新しいミュージアムの在り方として工夫していただきたい。

「会長」

子どもをターゲットにすると、機能が3つ必要。常設展示/企画展示室/子ども展示室とつくることで、企画展示室の面積が十分とれないのではないかな。

「事務局」

市としては市の施策である子どもファーストというところ、また今回の基本理念を形にしたような博物館にしたい。にぎわいつくりの場として1階に子ども展示室を持っていきたい。誰もが家族連れて子どもを連れて入ってきていただき、遊びながら学んでいただいて2階に行っていただく、という形を考えている。

子どもファーストという点は実現していきたいというのが文化財課の考え。

「会長」

委員会の意見を反映した提案を、4回目のときにしていただけないかな。

子ども展示をもっと練っていくという話は条件つきで承認する。

3. 案件2 ゾーニング・諸室・展示計画案について

※公共施設再編整備計画の考え方

「事務局」

新博物館整備の前提として、市の方で公共施設の再編整備計画の考え方について再度庁内で協議した結果を報告。

従来、東部地域における公共施設の再編成計画において、郷土博物館・埋蔵文化財センター・旧市史史料室、この三つを集約した新博物館整備を進めるという前提があったが、庁内で協議をした結果、この3施設の機能・収蔵品（文書・資料）の内、新博物館のコンセプトになじむものを取り込み、それ以外については、まだ残っている旧博物館の利活用、市内に点在している収蔵庫の集約という全体の枠組みの中で公共施設の再編をはかっていくという考え方で、庁内的な整備がついた。

具体的には、郷土博物館の収蔵品は全て新博物館に持っていくが、埋蔵文化財センター・市史史料室の膨大な資料については、全てを持っていくのではなく、必要な物だけを移管する。しほりがすこし緩くなった、自由な発想で新博物館を作れるようになったとご理解いただきたい。

（1）ゾーニング（各階配置）の説明

「事務局」

ゾーニングの大枠・各階の配置について説明。

前提として、新博物館は、日影規制による高さ制限・博物館としてある程度天井の高さが必要であることを考慮すると、3階建てが上限。

1階は文化財課案としては、子ども向けの展示、交流ゾーン。

これは、古くから賑いのある東高野街道に面して建つ新博物館を、街の賑わいとつながっている交流拠点のようなイメージを強く持たせたいという狙いがあるため。

道路側から見える場所に子ども展示を配置し、旧街道である170号線から広場、それから子ども向け展示を配置することで一体感を持たせることができ、博物館が目当てではない市民の興味をひき、入りやすい雰囲気を作り出したいと考えている。

2階は常設展示室と企画展示室。常設展示は子ども向けの一つの形として、小学校の社会見学のニーズにも合わせながら、歴史に関心を持つ一般客にも分かりやすい展示を行いたい。企画展示については鈴木会長からご指摘があった、学芸員の調査研究に基づく展示は勿論のことながら、大学と連携した調査研究の発表など、ある程度集客が見込める巡回展等の開催場所としての活用を想定している。社会見学や歴史に関心がある層に対しては、まとまったスペースを確保できて収蔵庫等のバックヤードとの効率性を考慮した所、2階に配置するのが最適と考えている。

3階はほぼ収蔵庫。収蔵庫を3階に集約することで十分な収蔵面積が確保できると考えている。現在の郷土博物館の収蔵品を全てここに移しても、まだゆとりが試算上ではある。今後の博物館活動の中で増えていく資料・収蔵品にも対応は可能と考えている。

実際の収容量については建築の面で、耐荷重や構造補強の検討の必要があると思うので、どれくらい建築費が増加するかということを考えたい。

(2) 諸室機能・展示計画案の説明

《トータルメディア》

1階が交流及び子ども展示を中心としたフロア、2階が展示を中心としたフロア、3階が一般の方は基本的に立ち入らない、バックヤード中心の収蔵のフロアという考え方で配置している。

提案している面積は決まりではなく、あくまで想定之物としてご理解いただきたい。

子ども展示室については、想定面積で175㎡。定員が最大50名程度入ったうえで、十分に活動できる広場として想定している。

同様に、常設展示室については、現郷土博物館が255㎡に対し、新博物館はガイダンス展示と合わせて約420㎡、特別企画展示室については現状110㎡とほぼ同等の面積を維持するということで100㎡と想定している。展示室の面積の考え方としては、現郷土博物館の面積と定員の考え方から想定している。

講座室・体験学習室といったセミナーや体験活動に使うスペースとして、講座室については現状82.5㎡のところ新博物館は80㎡と想定。体験学習室については、現状ピロティ含めて50㎡使って体験活動をされているので、新博物館では150㎡と、現状よりも広い面積を取り、余裕を持って活動が出来るような面積を想定。

これまでの小学校社会科研究会のヒアリングや、LINEアンケートの結果、団体受け入れに

については、最低1クラス30名前後がそれぞれの空間に入るところと、体験学習室については2クラス程度が同時に体験できる空間というのが基準になると考える。

定員の設定についてはご意見いただければ幸いと考えている。

各ゾーンの展示内容・展示手法を説明。

1階パークフロアは開かれていて学びのきっかけとなるフロアとして、自然と暮らしを中心に4つのテーマを周囲に展開していくような展示構成。

大きな展示のエリアとしては、ガイダンス・自然と暮らし・交流・モノづくり・いのりの形、大きくわけて4つのコーナーになる。それぞれ1案ずつ、それぞれこの空間でこういう展示が出来るのではというものをご提案。

例えばガイダンス。ここでは昔から今の生活の流れを感じていただくために、各時代の家族団らんを見せるような展示を一つの案としてご提案。

今の自分たちの生活と比べて変化や変わっていないものが想像しやすい食器等を使いながら、時代ごとの食事の変化、風景の変遷を、実物資料や当時の食事シーンの再現などで見ていただきながら暮らしの変化、歴史の流れを感じてもらう展示。

その他に土器のパズルのように、実物資料に触れるような展示を合わせて検討したいと考えている。

中央にあるのが、自然と暮らし。全身で思い切り遊ぶという展示方針。アスレチックやボールプールの中にも生駒の自然や地形を知っていただくようなものを散りばめたいと考えている。

モノづくり・いのりの形・交流について、2階の展示フロアの中にはモノづくりの要素として水車が必要不可欠な要素として入ってくるかと考えている。

水車の資料としては、模型や、実際の水車の一部分の資料が2階の展示フロアに想定されるが、1階の展示室では水車を原寸大のサイズ感を体感していただけるシンボル展示として考えたい。

展示の空間、こうしたアスレチック的な動きの空間、体全身を使って楽しんでもらう、といったような動の展示手法、動きのある展示手法の他に、落ち着いて資料を観察するきっかけ、資料を観察するステップの第1歩を体験してもらうというイメージの展示も加えたいと考えている。

この展示手法では、いのりの形のコーナーにそういった要素を反映している。交易品や仏像を紹介するコーナーだが、仏像を観察して実際に光背の図を自分で創造して書いてみようというような、より創造性の強い展示にしている。その他にも、実際の瓦の観察、本物の瓦を持って触ってみたり、拓本を採る体験をしてみたりのように、観察、想像して創作するような体験を展示の手法のなかに加えていきたい。

2階ミュージアムフロア、こちらはいわゆる常設展示室の考え方。

1階と同じテーマを持って作りながら、学びのきっかけの関連性を作っていくというところを考えている。

つまり、こちらのコーナーでは展示のガイダンス・交流・いのりの形・モノづくりというテーマごとに東大阪の歴史に触れていただく展示構成。こちらの展示室の中ではケースの中で本物の資料を見ていただくといったものだけでなく、ところどころでテーブルやスツールを用意しじっくり自分のペースで展示を楽しんだり、より詳しく学べたりするツールを散りばめたいと考えている。

テーマごとの展示コーナーには、それぞれ目玉となる展示資料を配置するテーマウォールケースを配置したい。ウォールケースの中の解説ではイラスト等を使用しながら分かりやすく表現するほか、現状東大阪市の文化財課で整備をすすめているデジタルアーカイブを利用したタブレットでの映像解説というものも検討していきたいと考えている。

そして、それぞれのコーナーの周囲には、スツールとテーブルを設置し、ゆっくり休憩しながら資料を観察したり、本物の資料に実際触れてみたり、3Dレプリカに触れながら、形の細部までを観察していただけるハンズオン要素の強い展示や、書籍から自分で学べるようなコーナーを設置したいと考えている。

※質疑応答

《委員》

特別企画展示室の面積が小さいと思う。

子ども展示室と常設展示室のリンクは必ずしも必要ないと思う。

《会長》

1階と2階のゾーニングをリンクさせる必要はない。遊びと学びはもう少し明確にしてほしい。

《委員》

1階は導入なので遊びがあってもいいと思うが、2階にも遊びの要素が多いのは避けたい。2階については学芸員の研究成果が出せるようにしていった方が良く考える。2階の子ども向け展示は、吹き出し解説などで対応できると思う。

《会長》

プランニングで子ども博物館の要素が多く、遊びがメインで学びが弱い印象。

学芸員の活動の場である展示室としての役割が発揮できていないのが課題。

《委員》

アスレチックなど大掛かりに遊ぶ空間と静かに落ち着いて展示と向き合う空間の両立のイメージが付きにくい。立地としては東高野街道沿いにあるので、街道で昔、町が栄え、それが

道路になり鉄道になりという歴史の流れもあるので、組み込んでほしい。

ほかにも東大阪には鉄道関連の会社、車の関連の会社が多くあり、そこで作られる工具を安全なプラスチックのレプリカにして触ってみるなどのハンズオン展示や、時代の移り変わりを表現したジオラマなどが良いかと思う。更には2階に歴史が感じられるような展示につながる、東大阪のものづくりに特化した展示を入れていただきたい。

《委員》

小学校としては「昔の暮らし」「大和川の付け替え」の内容を学ばせたいので、そこは縮小せずにいてほしい。

今は「大和川の水害・付け替え」は柏原市立歴史資料館の見学に行っているが、綿の生産（綿花）の展示などもほしい。

付け替えられたことで本当は東大阪に流れていた大和川が、堺の方に流れるようになり、そこで綿の生産が東大阪ではじまったことなどを伝えたい。子どもたちは東大阪でどうして水害が起きるのか知らないので、歴史地理の面から伝えたい。郷土博物館で小学生は綿繰り体験をしており、その学習要素を新博物館にぜひとも取り入れていただきたい。

《会長》

歴史のストーリーを作ってほしい。スポット展示が多いため、初めて歴史を学ぶ人にとっては、東大阪の成り立ちの新田開発を中心としたところに至るまでのストーリーが学校教育でとても重要なものである。それに特化したテーマで面積を半分くらい使ってなどの思い切りがあってよいのではないか。

《委員》

1階の子どものコーナーに関して、東大阪のモノづくり、文化に触れることができる場所として工夫を凝らしたうえで、メンテナンス面に配慮した展示作りが良いと思う。ボランティアガイドがどう関わっていくのかということもある程度イメージしたうえでの計画にしていけないといけないと思う。

全体の世界観が見えてきていないうえ、子どもの年齢にも幅があるときの実際の運用を想定しながら考えていく必要がある。

床の一部に、例えば大阪暮らしの今昔館の近代のフロアのような、昔の東大阪市パノラマを貼るなど展示の工夫の一つとして考えられる。

《会長》

2階の展示は現代とつながる歴史展示にしたほうがよい。特化したテーマを決めてからレイアウトするのがよい。

例えば、現代のハザードマップを用いて治水工事、新田開発や江戸と今がにつながるような視点で大きなしかけやガイダンスのビデオなど、テーマにそった手法を取ったほうが良い。仏像は狭い空間に仕切った方がよい。常設展示にしくなくてもよいのでは。

1 階のキッズミュージアムは近代史のモノづくり、車や電車などのテーマに特化した形でもう一回レイアウト案を作るのはどうか。常設のため展示替えは想定していない。ガイダンスコーナーを充実させてほしい。団体を受け付けるには面積が足りていない。運営の面を考慮して案を出していただきたい。

企画展示室と収蔵機能について、

常設展示室と企画展示室の面積バランスを改善してほしい。

収蔵庫は、特別収蔵庫と収蔵庫の二つに分けているが、収蔵品の内容によって決まる。

埃を除去して清掃したものと、埃や汚れのついたままのものを一つの大部屋に納めるのはいかがなものか。たとえば美術工芸品や古文書と、土埃の付いたままの考古資料または民俗有形文化財などとの間では収蔵方法が異なる。

調査室の計画はどうなっているのか。

《トータルメディア》

現案では 2 階の常設展示室から裏側の資料用の動線の間にある展示準備スペースを想定している。

《会長》

原案では狭いので、収蔵庫と同じレベルの方が良い。

また、写真撮影室は普通独立しており、物置としても使う。展示具を収納する部屋がない。パネルや模型を展示替えの時に片づけるスペースがないので、広場や廊下を 3m にするなど余分な空間がほしい。

交流ホール、連携コーナーが 1 階にあるが、機能を具体的に練っていただいて、商店街との交流やモノづくりの人たちとの交流など、このホールでどのような機能を持たせるのか、考えていただきたい。特に教育との関係で、子ども体験学習室と講義室と常設展示のリンクすることについて詰めてほしい。

《委員》

常設展示室・特別企画展示室の 2 階の動線計画を作るべき。原案は自由動線で団体行動がとりにくいのではないかと。強制動線だとしたらそれぞれのコーナーをどう結ぶか検討してほしい。

《会長》

強制動線であることが審議会の条件であると認識してほしい。

展示テーマには、新田開発、大和川の付け替えをぜひ入れ込んでほしい。大和川の付け替えにかかる子ども向けの展示は今まで見たことがないので検討してほしい。

4. 案件3 展示構成案について

事務局から展示構成案の説明。

《事務局》

ガイダンスには主に東大阪市の自然環境の移り変わりとその中で人々がどのように暮らしたのか。大地と自然の流れが分かるような映像展示を考えている。

展示は、「自然とくらし」、「交流」、「いのりの形」、「モノづくり」と主に4つの構成テーマを考えており、さらにその中で各コーナーに3つのテーマを掲げている。

「東大阪の自然とくらし」では、旧石器時代から近現代まで、河内湾・河内湖・生駒山をキーワードにして、その変遷と人々のくらしをリンクさせて見ていく展示で、以下の3つのテーマを設けている。

一つ目は「自然のめぐみとくらし」で、河内湾・河内湖・生駒山など自然とのかかわりの中で人々がどう生活をしていったのかを見ていく展示。

二つ目は「大地をたがやす」で、河内湖から変遷していく中で、農耕にかかわる歴史資料を見ながらくらしの移り変わりを見ていけたらと考えている。

三つめは「自然を制する」で、江戸時代の大和川の付け替えと管理、それ以前・それ以後、水とのかかわりを中心にさらに治水・災害をテーマに、現在のハザードマップとのかかわりも紹介し、現在のまちづくりと繋がることのできるような展示にしていけたらと思う。

「交流」については、以下の3つのテーマを考えている。

一つ目は「渡来人の足跡」で、東大阪の海の時代、河内湾から瀬戸内海をとおして大陸とつながっていたということもあり、渡来人の与えた影響とくらしの変化をみていく。

二つ目は「東大阪のみち、旅、名所」で、主に暗越奈良街道、東高野街道など大きなテーマとなるような街道があり、そこを行き交う姿を想像できる展示をめざす。さらに鉄道開通にともなって人やモノの動きにどのような変化がもたらされたのかを伝えたい。

三つ目は「争いと東大阪」で、交通の要所であった東大阪は、大阪・奈良に隣接し、北は京都、南は高野山にもつながっていた。その中で各時代の歴史的な政争や戦乱と大きくかかわっており、戦乱が東大阪の人々にどのような影響を与えたのかをテーマに取り上げていけたらと考えている。

「いのりの形」では、以下の3つのテーマを考えている。

一つ目は「いのりの造形」で、縄文時代以降の遺跡で見つかった祭祀にかかわる多くの考古資料から人々がどのような思いを込めたのかを知る展示。

二つ目は「吊いの形」では、生駒山麓を中心に多くの古墳がみつかり、副葬品などから当時の人々の姿や死者への思いを知る展示。

三つ目は「寺社仏閣年中行事」で、市内に現在も寺社仏閣が多くあり、人々の暮らしの中で信仰がどのように浸透し現在にいたるのという展示。

「東大阪のモノづくり」では、以下の4つのテーマを考えている。

今現在の東大阪はモノづくりの街というイメージがある。常設展示については4つの大きな柱を持ちながら、その中で原始から現在までつながるような展示をしたい。

一つ目は「モノづくりの源流」で、原始古代のモノづくりについて、生駒山の粘土や金属製品の生産など、東大阪は昔からモノづくりが盛んというのを知ってもらうきっかけになる展示。

二つ目は「河内木綿」で、モノづくりの柱の一つである河内木綿について、工程や体験を通して知ってもらう展示を考えている。

三つめは「生駒西麓の水車産業」で、生駒の水車産業と現代のモノづくりとのつながりを、地域的な特徴とも併せて言及したい。

四つ目は「モノづくりのまち東大阪」で、現代のモノづくりのまちにつながるような、明治大正昭和のモノづくりについてどのように変化し、どのようなアイディアがあり現在のモノづくりのまちにつながったのかについて言及したい。

※質疑応答

《委員》

小学校・中学校の学習指導要領があるが、それに沿った形で組み立てているか。

時々変わるので、変わる時を注意した方が良いと思う。

《会長》

内容として常設展示より、企画展示のテーマと考えている。

項目ごとに、例えば、信仰・神社仏閣・串いの形・いのりの造形・仏像が出てくる場面があるが、大学と連携して研究・調査して、展示に反映してはどうか。

近代は様々な先生の情報を得て、テーマを増やす必要がある。

《委員》

近現代は、モノづくりなら商工会議所や産業技術センターに聞くと、詳しい歴史・近現代史がわかるかもしれない。

《委員》

常設展示で観覧者を助けるツール、道案内になるような何種類かのガイドブックがあると良い。場合によっては、ボランティアや大学と連携しながらでも、より深く学ぶ助けとなるツールを検討していただきたい。

企画展示室と常設展示室の間に、ところどころトピック的な新しい発見があったらそれを紹介できるような、展示コーナーが差し込まれているということがあってもよいと思う。

交流コーナーも、フィールドミュージアムの窓口となるという位置づけであるので、ネットワークや案内の仕方をどう計画するのかということも詰めていってほしい。

《委員》

「東大阪の自然とくらし」は、子どもたちにとって興味深いところと考える。
先日、埋蔵文化財センターから土器が発掘されたというのが、子どもたちは驚いていた。ハザードマップも興味深い。高台が水害指定されていることについて子どもたちは疑問を持っている。デジタルを使えばさらに興味を持って学習できると思う。

《事務局》

次回の審議会について、7月29日（月）9時30分より開催。会議場所について追ってご連絡。日程は調整済みです。それでは本日の案件を終了いたします。委員の皆様お疲れ様でした。

5. 閉会